11 複 式 教 育

自立に向かう子どもたちをめざした複式学級における支援

吉浦　公子・松田　芳明
松浦　武人・阿比留時彦

1　本校における複式教育のとらえ方

現在，へき地小規模校においては，交通条件や規模におけるマイナス面の克服ではなく，その特性を「よさ」として捉え，積極的に教育に生かしていこうという優れた実践研究が進められている。

また，最近，都市部あるいは，その周辺においても，児童数の減少から，少人数学級や複式学級も見られるようになり，へき地小規模校のこれまでの研究に加えて，都市部小規模校としての特性をどう生かしていくかが課題となっている。

これらの小規模校の実践研究は，単にその学校の教育に留まらず，単式学級のみで構成される大規模校においても，これからの教育の在り方を探る１つの方向を示すものと考えられる。

本校は，これまで「個が生きる授業」「個が生きる授業の評価」「豊かな感性を育む」の一連の研究テーマを通して，複式少人数学級の「よさ」を生かしていく教育の研究を進めてきた。

これまでの研究成果をふまえて，本年度より「自立に向かう子どもたち」を重点課題として実践研究を進めることにした。

2　複式教育を通して育まれる自立とは

ここでは，複式少人数学級の特性を「よさ」して生かしながら，その中で自立に向かう子ども達を考えていく。

へき地小規模校における複式学級の特性としては，異学年集団による学級構成，少人数の授業構成，周囲の恵まれた自然環境，地域と学校との連携の深さ等が挙げられる。

このなかで，「異学年集団による学級構成」「少人数の授業構成」は，本校のような都市部の複式少人数学級においても共通の特性である。

新しい学力観で重視される自ら学ぶ意欲や思考力，判断力，表現力などの資質や能力の育成の点から，複式少人数学級の「よさ」の中で期待される自立の姿を考えた。

(1)　相手の立場や気持ちを尊重する

異学年相互の関わりの中で，上学年の児童は，下学年の児童との触れ合いから，これまでの自分の姿を重ねながら思いやりをもって接するようになる。また，その活動の中で，自分の成長に気付くこともできる。下学年の児童は，自分たちの活動には上学年の児童の支えがあったことに気付き，喜びを感じると共に自らも学ぼうとする。さらにこれからの自分の姿を描くこともできる。このように，異学年の関わりのなかで，自立に向かっていくことが期待できる。

(2)　一人一人が主体的に活動する

複式学級の授業では，多くの場合１名の教師が，複数の学年を同時に指導する。異学年指導（特に異単元異内容指導）を行う際，これまでは，「渡り」（直接指導と間接指導を区別した授業）型支援が多く見られた。この「渡り」型支援では，間接指導において，低学年の段階から，子どもたち自ら学習を進めていく力が必要とされる。

この「渡り」型支援では，教師は，常にどちらか一方の学年を指導することが前提となっている。その支援のよさをふまえながら，可能である場合は，「渡り」型支援の考え方をさらに進めて，教

師が両学年を見守るという「見守り」型支援も積極的に取り入れていきたい。教師は，児童の活動を見守りながら，支援の時期・方法をつかみ，一人一人の子どものよさを見取る。この支援により，さらに自立した子どもの育成が期待される。

(3) 一人一人の「よさ」が生きる指導と評価

少人数学級は，教師が子ども一人一人の思いや願いを理解し，個に応じた指導を進めやすい環境にあると言える。例えば，観察法による評価において，児童一人一人の行動の記録を継続してとりながら，それぞれの変容を見ていくことも可能である。また，前述した「見守り」型支援等において，子ども一人一人の児童の活動を見守りながら，個に応じた学習指導を充実させていくことは，これからの教育のあり方において一つの方向を示すものともいえる。

3 複式学級における子どもたちの「自立」をめざした支援の工夫

(1) 異学年の関わりを生かした授業の工夫

複式学級では，２学年以上の集団が同時に学習する。そのため，教科によって，異単元異内容指導と同単元同内容指導に分けて授業を行う場合が多かった。子どもたちの「自立」に焦点をあててみると，学習内容によっては，異単元異内容を部分的に同内容にしたり，同単元同内容を同単元異内容にかえて，２学年の関わりを生かしていくことも考えられる。

① ２学年が共通に学習する場合の設定

これまで異単元異内容指導が中心である算数等の教科において，１時間の授業の導入や展開の部分で共通の学習の場を設定してみる。２つの学年の子どもたちは，それぞれの気付きや考え方に触れながら，単一の学年よりもさらに豊かな学習となることが期待できる。また，内容によっては，１単元すべてを両学年共通として年間計画に位置づけて２つの学年で単元を共に進めることも考えられる。

② ２年間以上にわたって継続する活動

生活科等で，２年間の継続した単元を複式学級の特性を生かして計画するとさらに豊かな生活が期待できる。また，Ａ・Ｂ年度方式の学習では，年間計画上では，２年間を１サイクルとして学習が完結するが，実際には，学級の歴史となって構成児童は変化しても受け継がれて行く場合が見られる。これは，前年度の１年生の児童が，体験の記憶をもった２年生として学級に残り，次に伝えていく複式学級ならではのよさである。この学級の「小さな伝統」のよさに着目して，次の下学年に受け継がれて行くような活動も考えてみる。

(2) 子どもたちの手で企画・運営する交流学習

本校では，これまで数年間に渡って，他の地域の学校と交流学習を行ってきた。両校の交流学習が定着してきた本年度は，活動を教科・特別活動等の年間計画に位置づけ，年間を通して両校で進めていく。その中で，子どもたちが企画し，運営しながら交流学習を進めていくことができるように，両校の教師が連携をとりながら支援していきたい。

(3) 「見守り」型支援の充実

教師の直接・間接指導に関わりなく，子どもたち自らの手で学習を進めていく力を育む「見守り」型支援の部分をさらに拡大していく。この支援では，教師は，個や集団の状況の見取りながら，柔軟に対応することができる。そのための，支援の工夫としては，次の点が挙げられる。

① 学習の進め方の明確化

② 問題解決学習の場における活動の観点や自己評価規準の提示

③ 日直司会による進行の場の設定

④ 教室環境の整備